

第48回 暁天講座法話録（2014年7月19日）



講師 三橋 尚伸 氏

（真宗大谷派僧侶、産業カウンセラー）

講題「死ねない時代を生きる」

（1）死なせてくれない時代

あらためまして、皆さま、おはようございます。

いっぱいお集まりで、今日は「死ねない時代を生きる」という内容でお話しさせていただきます。

ご紹介がありましたように私は普段、僧侶としてよりも心理カウンセラーとして、いろいろな患者さんやご家族の方に関わってきています。

私がカウンセラーになった当初、もう20年以上前ですかね。当時は、生きたいのに生きられない、要するに病気になったり大きなけがをしたりすると、本当に生きたいのだけれども生きていくことが難しい時代だった。主にそういう対応をしてきていたんですね。

ところが近年になって、ちょっと違ってきたなって思うようになったのです。死にたいのに死なせてくれない時代が変わってきた、そんな感じがしています。

自分が非常に不都合な状態になったとき、重病を患ったときや大きな事故でけがをしたとき、あるいは不条理な災害にあって、いろいろ精神的にも本当に厳しい状態になったようなとき。最初私たちは、早く回復したい、治りたいと思うわけですね。これはその当時とあまり変わらないと思う。

ところが今は、これはよいことなのでしょうけれども、医学が非常に進んできましたので、治療がある程度まではうまくいくようになってきた。ところが本当に重篤な状態というのは、実は昔と変わらないのです。

例えばがんの場合、初期のがんの発見はとても上手にできるようになったので、治りやすい。みんなここだけを見てしまう。では本当に末期になったとき、昔より私たちは治せるようになっていくかというと、残念ながら変わっていない。ただ数字のマジックで、早期の発見が多くなったから、全体のパーセントとしては治る確率が高まったように見えるのです。

自分が実際がんになったり、大事な人がそのような状態になったときに、治らないことが分かるわけですよ。「ああ、もう無理なんだな」と。そういうときに、緩和ケア病棟といわれるところに「転院しなさい」と言われたり、「おうちに帰って好きなことをしてお時間を過ごしなさい」と、通告をされるわけです。それで、いよいよもう間に合わないんだなと悟るわけです。そこで腹をくぐれば良いのですが、そうはうまくいかない。

自分の状況をイメージしてくださいね。まず、自分で歩けなくなったり、これはがんだけじゃないですよ、年を取ればみんな多くの方が同じ道をたどるわけですがけれども、あっちができない、こっちができない。痛みは増えてくる。できないことも増えてくる。ご飯を自分で食べられなくなる。トイレに一人で行けなくなる。でもここは人間として最後の部分なので頑張りたんですよ。それが許されなくなるのが近年なのです。

「自分でトイレに行けるから行かせて」と言っても、転んでもっと大ごとになったらいけないので、医療者から止められ家族から止められ、自由を奪われるのです。おむつを当てられます。排泄は最後のとりでのところですから、おむつを当てられたときに、人間というのはものすごくプライドが傷ついて、「こんな姿になってまで生きていたくない」と始まってしまう。

でも体は生きているのですよ。ご飯も人の手を借りないと食べられなくなる。そうすると「家族に迷惑を掛けている私は生きてはいけないんじゃないか」と始まってしまう。これは自宅療養でも同じだし、病院の中でも施設の中でも同じ反応なのです。

さあ、家族の手を借りてご飯を食べていた、そのことも次第にできなくなる。誤嚥、間違えて気管に入っちゃう。もう私も老人の年なので、飲み込みが悪くなって、気管に入りそうになって、むせることがすごく多くなっています。

(2) 生かされてしまっている

そうすると今度はどうされるかという、今の医療では、胃に穴を開けられます。誤嚥性肺炎で死んでしまうことをなくすために、じかに胃に穴を開ける「胃ろう」というものですが。そうしたらもう誤嚥はなくなるわけですね。

私が契約して行っている病院でも、もう時間になると500mlですかね、このくらいのパックのどろどろの栄養剤、お食事なのでしょうね、それをつなげるのです。終わったら、管を抜いて、洗って、また時間になったら管をつけられるのです。

これもどうでしょうかね。自分がそうなったとき、人間として生きている姿と思えるのかどうか。胃ろうにするかどうかの決断も、ものすごくみなさん苦しんでいます。言い方は悪いですが、そういう姿になってまで生かしておくことが、その人にとって本当に意味がある時間になるのだろうか。

おむつを当てられたり胃ろうを造られたりする、そんな姿で生きているのがつらいと感じてしまった場合、管を取ろうとします。これはしようがありません。自然な反応です。嫌です、たぶん。そうすると、取ったらまたいのちがなくなってしまう危険がある。このようなとき、どうすると思いますか？

長い介護の経験がある方はご存じだと思いますけれども、今病院では拘束ということをし

るのですね。拘束、縛るということです。私は病院に行くたびに、いっぱいそういう姿を見えています。まずベッドに拘束されるの。このくらいの幅のベルトで、胸部をベッドに固定される。鍵は手の届かないところに置かれています。

私はいつも簡衣・輪袈裟姿で病院をうろうろしていますから、みんな私がお坊さんだと分かるのです。「ちょっとちょっと来て」と呼ばれる。どうしたのと言うと「あの鍵取って」「これ外して」「管抜いて」、いつもそれを頼まれる。「これさえ外してくれたら一人でトイレに行けるんです」と訴えられるのですよ。でも私にはその権限がない。万が一何かがあったときに、私は責任を取れません。だから申し訳ないけど私はそれができないと、私も苦しいですけど、お断りします。

そうすると次に何を頼まれるか。「じゃあ殺してください」と頼まれるのです。「今日も生きてしまった」「目が覚めたらまだ生きている」と、それを訴えられるのです、毎回毎回。「あなたはお坊さんなんでしょう?」、はい、そうですと言うと、「毎日阿弥陀さんに早くお迎えに来てって頼んでいる。だけど目が覚めたらまだ生きている」と。だから、生きていることが全然喜びになっていないというのが今の現状なのです。

ちょっと前までは「人間は生かされているのですよ」という言葉を、プラスの意味に私たちは使っていました。今はマイナスのイメージで使われているのです。死なせてくれない、生かされてしまっている。言葉の意味が今、がらっと変わっています。こういうところを私たちは生きていかなければいけないのですよ。

それは10年後なのか、あしたなのか今夜なのか、誰にも分からないのですね。「もう早く殺して殺して」といつも言われるたびに、「ごめんね、ごめんね、できない」と謝っているのです。こんな日々を生きているのですね、私は。

(3) 一切皆苦

そういう人たちを見ていて、私もどんどんできないことが増えているし、同じ道をたどるのだろうかと思いつつ、いろいろなことを考えていると、仏教の基本中の基本である「一切皆苦」ということが、ふっと頭に浮かんできます。お釈迦様はやはり本当のことをおっしゃっていたのだと、あらためて考えます。

一切皆苦。もちろん皆さんご存じだと思うのだけれども、四苦八苦ですね。この世のものは全て苦である。その中の有名な最初の四つは「生老病死」ですね。私はほとんどここを見てきました。みなさんもなんとなくイメージとして、これはやはり「苦」苦しみだらうなというのは想像できると思うのですね。

「生」はどうですか? 苦の一番初めに、お釈迦様は「生」をおっしゃったのですよ。世間では、人間が生まれた、動物でも一緒ですけども、誰かが生まれると「めでたい」と言うのです。よくぞ生まれてくれたと。喜びごと。でもなぜ仏教では苦が一番初めにあるのでしょうか。普段ここを考えていないのです。老・病・死ばかりに目がいくのですけれども、この「生」が大事なのですよ。

例えば、ご長寿のご老人のインタビューなどをすると、「こういう軽い運動を続けていたから、長寿になった」とか「食べ物に気をつけていたから」とか「毎晩少しの晩酌を続けて

きたから」だとか、いろいろなそれらしい理由を言いますよ。それは全部、自分の努力という答えですよ。これを気をつけていた、こっちも努力した。果たしてそうですかね。

みんな「老」になっていく。人によっては多くの方が「病」になっていく。そして完璧に100%死に至るわけです。この生、どういう生まれかということ、自分の体をよく見てみてください。あなたの心臓は、あなたの努力で動かしたことがありますか？ 命令したら動いてくれますか？ 何も私の努力は関係ないのですよ、この体って。

たぶんお話が終わったら、朝のお食事を食べられると思います。ご飯を食べます。誰が消化してくれているのでしょうか。小腸で水分を吸い取ったり、大腸で吸い取ったり。蠕動（ぜんどう）運動ね、ぐじゅぐじゅ動いて食べたものを下へ下へ、下ろしてくれている。その運動はあなたの努力でしたか？

どういう体で生まれたかを考えれば、これが一番最初にくる意味が分かります。自分の努力が一切無関係。何の努力も間に合っていない。そういう体で生まれてきたということが事実です。

そこを忘れていきます。自分の努力でどうにかなっていると思ひ込むわけですよ。そして都合よく理想的にいくと、ああ、自分の努力がかなったな。都合が悪い結果が出ると、努力が足りなかったかなと原因探しをするのです。

でも本当は一切関係ないの。死ぬときには死ぬし、心臓が止まるときには止まるし、残念ながら止めたいと思っても止まってくれないし。今は医療が止めてくれない。そこを生きなければいけないから、ものすごく苦痛なわけですね。だから最初に「生」がきている。そういう生、生まれをもって、この世に出てきたのが私の事実です。そういうことなのです。

(4) 意味を問う苦しみ

この「生」が一番最初でしょう？ ここだけでも今日は覚えて帰ってもらいたいなと思います。これはどうしようもないところ。お任せするしかないの。

心理学的に、こういう「苦」の内容をいろいろ分析するわけですがけれども。心理学的な分類だと、苦の中にはまず肉体的苦痛がありますね。精神的な苦痛もありますね。友達に裏切られたとか、友達ができないとか、なりたくない病気になってしまったとか。これも全部、精神的苦痛ですよ。病院などに入院したら、自由も奪われる。転んで死んでもいいから、自分でトイレに行きたいと思っても許してもらえなくなる。これも全部、精神的苦痛ですよ。

もう一つ、社会的苦痛というものもあります。自分の体や精神が悪くなったり壊れてしまうと、今は会社を首になってしまったり、閑職に追いやられたり、収入が減る、肩書がなくなる。こういうのが社会的苦痛です。みんなこの「一切皆苦」に入ります。

そして最終的に、靈的苦痛と言われる苦があります。これは幽霊の靈ではないのですが。ぴったりの訳がないので、取りあえず靈的と言っていますが、全人的苦痛とも言いますね。人間丸ごとの苦痛、あるいは哲学的な苦痛。これが出てくるのですよ。

先ほど例に挙げたように、「なんでこんな体になってまで、なんで人の迷惑になってまで、お荷物になってまで生きていなければいけないんですか」というのがこの苦しみになるのです。意味を問う苦しみです。

人間はとても複雑で、死ぬのにも意味が欲しい、生きているのにも意味が欲しい。とても複雑だと思います。なかなかシンプルに生きられなくなっているのですよ。私が生まれてきた意味は何なのだろう。こんな人生でよかったのだろうか。これは全部、意味を問うているわけですね。

私が精神病にならなければならない意味って何だったのだろうか。私が災害に遭って全てを失い、自分だけが残った意味って何なのだろうか。これを靈的苦痛と言うのです。

この苦痛に対応する人が今はなかなかなくて、本来はおそらく宗教者がしていたのだと思います。今、病院や、あるいは個人的に面接をしている精神疾患で苦しんでいる方たちは、みんなその対応を求めています。

おそらくご家族の介護などを行っている場合でも、同じような問いを問われると思うのですよ。「なぜ私は生きなければいけないの?」「こんなことだったら生きている意味がない」と。「早く殺して」と頼まれた方がいらっしやるかもしれない。

そういうときに皆さんはおそらく、答えようとすると思いますね。質問、**Question** に対して答える、**Answer**。でも答えられないのですよ。実はこの苦痛というのは、「答えのない問い」と言われています。答えがないのです。だけど問われたら、私は応えています。応じる。**Response** です。

もし皆さんが今後、このような問いを受けなければいけない状態になったときには、何かを答えてあげるんじゃなくて、応える、その問いに応える。その人の気持ちに応える。「生きていたくないよね」と。「苦しいよね。でもいのちって自分の自由にならないからしのでください」と。気持ちに寄り添いながら応えることが大事になっていくのです。

家族もそうだし、親友がそうなったときにも、おそらく本音を出されたらば同じような問いが、いっぱい出てくると思います。そのときにはぜひ、**Response** で応えてあげてほしいと思います。

(5) 食・瞋・癡

この苦しみは、なかなか死ぬまでなくなるわけですがけれども。これは、どういう私たちが生きているから、もっと苦しくなるのかということ、ご存じのように、「食瞋癡（とんじんち）」の私が、ここを生きなければならぬわけですね。

食瞋癡はご存じだと思います。食欲（とんよく）、普通の読み方だと「どんよく」。瞋恚（しんに）、愚痴（ぐち）。もっとありますよ。慢（まん）、疑（ぎ）、悪見（あっけん）。本当のことを疑って妄想を信じて生きているのです。

私が行っている東京の教務所では、標語が書かれて表に貼り出されているのですが、すごい標語を見ました。普段私たちは食瞋癡というのを分かっているのですが、私の一部がこの食瞋癡だと思っています。

ところがその標語には、こう書かれていました。これ、煩惱でひとくくりにしてしまいますけれども。「私の煩惱ではなく、私が煩惱であった」と書かれていました。ときどき私の煩惱が出るとか、私の一部が煩惱なのではなくて、私が「煩惱そのもの」で出来上がっていた。これが私の本当の事実だ、姿だ。こういうことが書かれていたのです。

煩惱でできているのですよ。だから死ぬまでなくならない。どれだけ努力してもなくすことはできない。今のはちょっと覚えておいてくださいね。なくすことはできません。

だから、不都合なことが起きるたびに、「もう死んでしまいたい」「殺してくれ」。自分が都合よく生きられるときには「もっと生きたい」。食欲（どんよく）ですよ、食欲（とんよく）。人と比較しては、怒ったり、うらやましく思ったり、ねたんだりして蹴落としてやろうと思ったりするわけです。そして、ぼろぼろ愚痴として出ていくわけです。これが私の素というか、それでできている。

「慢」もあるでしょう。自慢、卑下慢。私たちは生きているときに、必ず何かと比較して生きています。世間と比較したり、知っている誰かと比較したり、隣の人と比較しています。そして、勝った、負けた。勝ったら自慢、負けると日本人は卑下慢になります。「どうせ私なんかは」と。全部「慢」ですね。そして「疑」。

まず、私の体の本当の姿を知らない、疑います。「いやそんなことはない。努力は有効です」と言いますね。私がこの煩惱でできているということも疑います。私は違うと疑います。人の煩惱は見えるのですが、自分の煩惱はなかなか見えにくい。たまに見えるときがありますが、すぐに忘れてしまう。真実を疑って、世間の価値観とか、妄想、仮の姿の方を信じる。これ、「疑」ですね。

こういう在り方を「悪見」と言っているわけです。これが私の姿ですよということを、ちゃんと言ってくれているのだけれども、お寺に来るときくらいしか思い出さないのです、私もそうですが。寺を一步出たら世間になってしまう。だから何回でも来なければいけないのです。

いつもいつも、仏教とかお浄土から「忘れてないか?」「思い出しているか?」「本当の自分って分かっているか?」と刺激されないと、もう忘れるの。それが私です。私も、のべつ忘れている。こういうお話をするときだけちゃんと思い出すのです。だから一生涯に何回でも何回でも思い出す機会にするために、お寺に来たり仏壇に手を合わせたりすることが大事なのです。

あと亡くなった方を思い出すこと。これも大事です。亡くなるということ、まさに体をもって、どんな体だったのかを教えてください。あるときふっと死んでしまったり、本当は死にたくないのに自殺をせざるを得なくなったり。全部これは、亡くなった方が教えてくれることです。ときどき思い出すために仏教に触れ合ってくださいね。

(6) 無明の酔い

親鸞聖人は、こういう厳しい状態の私たちに対してどのように言ってくださっているかというのを、今日のレジュメの後ろに親鸞聖人のお手紙をプリントしてあると思います。

これは1252年に親鸞聖人が80歳のときに、同朋ですね、同じ道を歩む地方の方々に向けて出されたお手紙といわれているものです。これは結構厳しいですよ。ただとても文章がきれいですし、お勉強じゃなくてお手紙なので、誰にでも分かりやすいように書かれています。今日は続けてそのお話をしたいと思います。

まず最初に、少し解説をしながら読んでみたいと思います。今までのお話をイメージしな

がら聞いてみてくださいね。

「明法御坊の往生のこと、おどろきもうすべきにはあらねども、かえすがえすうれしう候う。」

まずこの一文でびっくりしてしまうのですけれども、どうもこれは、最初に親鸞聖人のところに明法房というお坊さんが亡くなってしまいましたというお手紙が来たようなのですね。それに対するお返事です。

明法というお坊さんが往生された、亡くなったということ、「おどろきもうすべきにはあらねども」。取りあえず驚くべきものではないけれども。まあ自然なことなのですよ。かえすがえすうれしう候う。」です。

なかなか言えないですよ、これ。お浄土に往生されたといつもいつも口では言っている、実際にどなたかが亡くなったときに、返す返すもううれしい、喜ばしいことですよ、ちょっと私でも言えないですね。でも手紙に書いているのですよ。

「鹿島・行方・奥郡、かようの往生ねがわせたまうひとびとの、みなのおよろこびにて候う。」。この鹿島の辺りの地方の、往生を願っている、浄土の教えを生きて浄土往生を願っている皆さんの喜びであることでしょうか。みんなも喜んでいることでしょうかということですよ。

また、もう一人どうも亡くなったらしくて、

「また、ひらつかの入道殿の御往生ときき候うこそ、かえすがえす、申すにかぎりなくおぼえ候え。」。平塚というところの入道ですから、たぶん完璧なお坊さんではなくて修行者のようなお方ですね。入道さんが亡くなった、そういう話をうかがいました。が、特段に言うこともないことですよ。「めでたさ、申しつくすべくも候わず。」。これ以上めでたいことはありませんね。これはすごい手紙だと思いますよ。ちょっと書けないですよ。

レジュメには何行か抜いてありますけれども。

「もとは、無明の酒に酔ひふして、食欲・瞋恚・愚痴の三毒をのみ…」

さあ、いよいよここですね、三毒。食欲・瞋恚・愚痴。もともと私たちは無明という酒、食欲・瞋恚・愚痴という無明の酒に酔っていて、しかも「好みめしおうて候ひつるに、」。これ、嫌っていないのです。そういう自分を嫌っていない。好んでいる。

「候ひつるに、仏の御ちかいをききはじめしより、」。そういう私たちだけでも、ほとけの、阿弥陀仏の誓い、そういう人こそ助けるぞという誓いを聞き始めてからは、「無明の酔いもようようすこしずつさめ、」。貪瞋癡を好んでいるような、酔いつぶれたような状態から少しずつ目が覚めて、「三毒をもすこしずつ好まずして、」。こういう私から一歩も離れられないけれども。さっき無くせませんよと言いましたが、無くせないのだけれども、「好まず」、好まないようになる。仏の誓いに触れると酔いが少しずつ覚めて、三毒である生き方を好まないようになると書いているのです。

「阿弥陀仏の薬をつねに好みめす身となりておわしましおうて候うぞかし。」。三毒を、いいわいわと好んでいる生き方ではなくて、阿弥陀仏という薬を好むようになっているのですよ。無くならないけれども、いいわ、いいわじゃなくなっているはずですよおっしゃっています。

「しかるに、なお無明の酔いもさめやらぬに、かさねて酔いをすすめ、」。そうなのに、そ

うであるのになお、これ、無くならないですから。なお酔いもさめないのに、三毒が無くならないのになお「重ねて酔いを勧め」。もっとやっちゃいなさいよ。お酒でいえば、もっと飲みなさいよ、どうせ酔っているんだから、ということです。

ここで「どうせ」がでてくるのです。先ほどの、病院での実態もそうですね。「どうせ死ぬ身なのだから」「どうせ治らないのだから」「どうせ何もできないのだから」「どうせ」が始まるのです。

「毒も消えやらぬになお三毒をすすめられ候うらんこそ、あさましくおぼえ候え。」

いまだにひどいこういう貪瞋癡に酔いつぶれているのに、なお毒を好んで、しかも勧め合っつて。「いいじゃないの、どうせ酔っているんだから」「どうせ三毒でできている自分なのだから。何をしたっていいじゃないの。もっと酔っちゃいなさいよ」というのは、あさましくありませんかと書いてあるのですね。「あさましく候え。」。悲しいことですねと。

何百年も前に、今の私たちを見通して下さっている。こんな古い時代のお手紙が、何も変わらず今を言い当てているのです。今の私を。

(7) 厭 (いと) うしるし

「煩惱具足の身なれば、」。具足というのは完成されている、これで出来上がっている私という人間であればこそ、「こころにもまかせ、身にもすまじきことをもゆるし、」。もう心のままに、やっちはいけないことも平気でやっつてしまう。

「口にもいうまじきことをもゆるし、」。言っつちはいけないことも平気で言い、「こころにもおもうまじきことをもゆるして、」。思っつちはいけないようなひどいことをも平気で思い起こして、「いかにもこころのままにあるべしと申しおうて候うらんこそ、かえすがえす不便におぼえ候え。」。

お互いにこころのままに、煩惱に任せて生きていけばいいじゃないのと。お互いに言い合っていることは「かへすがへす不便におぼえ候え」。本当にふびんです。かわいそうな、残念なこととおっしゃってくれているのですよ。

「酔いもさめぬさきに」。これがなくなる前に、「なお酒をすすめ、」。煩惱のまま生きる生きろと勧め、「毒も消えやらぬものに、いよいよ毒をすすめんがごとし。」。煩惱の一部もなくなっていないのに、もっと毒を勧めているのと同じことをしていませんかと。

ここからちょっと有名なところですよ。

「薬あり毒を好め、と候うらんことは、あるべくも候わずとぞおぼえ候う。」。治す薬があるからといって、わざわざ毒を好めと、もっと毒を食らいなさいということはあつてはいけないことです。そうおっしゃっています。

「仏のちかいかをもきき」南無阿弥陀仏を聞き。「念仏も申して、」。南無阿弥陀仏と称えて、「ひさしうなりておわしまさんひとびとは、」。もう長い年月がたつておられるでしょう、皆さんは。そういう人々は「この世のあしきことをいとうしるし、」。世間の悪さですか、仏教ではない世間の価値観の悪さを、厭う、嫌うしるし。「この身のあしきことをいといすてんとおぼしめすしるしも候うべしとこそおぼえ候え。」。

この身の、さっきお手紙に書いてあつたように、言っつちはいけないことを言っつてしまうこ

の身、やってはいけないことをやってしまうこの身。それをいいというのではなくて、嫌うしるしが出てくるのではないのでしょうかとおっしゃっているの。

念仏があるから何をしてもいいのだということはある得ないことですよということです。少なくとも阿弥陀仏の誓いを聞いたことがあって、少なくとも念仏を称えて久しくなっている人たちは、この世の世間のよし悪しを嫌い、自分の身が悪いことをしたり考えたりやってしまうことを嫌う。そういう気持ちが出てくるのではないのでしょうか。そういうお手紙なのです。

これはとても重要で、浄土の教えに出遇うと何でもありだと思ひ込んでしまう人がとても多いと思います。いつとき、そういうことでひどい人がいっぱい出た時代があったようだけれども。そうではなくて、本当の生き方に目覚めた人は、この世の悪しきこと、この身の悪しきことを捨てなくとも、厭う、嫌うしるしが出てくるのですよということなんです。

阿弥陀さんがどういう生き方を望んでいるのか。わざと悪いことをしなさいということは阿弥陀の誓いにはないですよ。少なくとも、韋提希（いだいけ）さんのお話にも出てくるように、最初は利己主義です。貪瞋癡でできていますから。「私だけが助かりたい」。みんなそうです。だけど韋提希さんも阿弥陀さんの教えに出遇ったら、みんなが救われるためにはどうしたらいいのでしょうかと問いが変わってきた。これは『観無量寿経』などを読むとそうなっていますね。

自己中心の私、それは何も変わらないのだけれども、少し生き方が変わってくるのです。これは賢善精進の努力ではないのです。何かが変わるのです。それが「この世の悪しきことを厭うしるし」。

「本当はどうやって生きたらいいのだろうか」「本当に生きるってどういうことなのか」ということに、ふっとところが向くような生き方に変わるのです、煩惱でできている私が。これがすごいところなのです。

そうになったら、どんな状態になっても「殺してくれ」だの、都合のいい時だけ「もっと長生きしたい」だの、それは世間の生き方ですから、そこからはちょっと違ってくるのではないかということが、このお手紙に書かれていることなのです。

（8）預かるいのち

最初の「生」に戻ります。生まれるということはものすごく大事なところで、生まれたときに、めでたい、喜ばしいと言いますね。これは世間の価値観です。その次にみんな何と言うかという、「子どもを授かった」と言いますね。普通に言いますね。私の手に受け取った。もらった。いのちを私がもらった。そうでしょうか？

死があるのですよ。返すのですよ。もらったものは、普通は返さなくていいの。もらったのですから。でも返すのだから、授かっていませんよ。授かったは妄想です。預かったの、一時的に。

「生」、生まれたというこの身は、一時的に預かっているだけです。だから返さないといけないの、100%返さないといけないのです。この当たり前の事実をみんな忘れてます。疑ですから、本当のことを疑っているのですよ。もらったものだと思ひ込んでいる。うその方

を信じているのです。

自分がいざ返す時期が近づくと、おろおろして。いえいえまだ返したくありません、もっと生きていたいです。何も悪いことをしていないのに、何でこうなっちゃうんですかと始まるのです。

逆は、「もう嫌だ」です。都合が悪い状態が続いたら、もう嫌だ返したい。でも預け主と言っていいかどうか分かりませんが、預けた方は返してと言ってくれないのですよ。今日も言ってくれない。今日目が覚めたら、まだ預かれと言っている。困った困った、早く返したい。自己中心ですよ。

預かっているのですよ、いのちは。何年預かるかなんて、全然こちらが決めることではない。残念ながら、生後一カ月でお返しするいのちもあるし、おなかの中でお返しするかもしれないし。

今は病院に行くと、90、100歳は当たり前。百年預かれと言われる場合もあるのですよ。おむつを当てられながら。胃に穴を開けられながら。

残念ながら、認知症もあります。これは見えて本当に苦しいです。なりきってしまえばいいのですが、なりかけはものすごく苦しいです。見えても本当にかわいそう。自分もあしたなるかも分からないのですが。本当につらいです。

人間は、自分が壊れかけていることをはっきり自覚できます。ありがたいことなのかどうなのか分からないですが、いろいろな妄想が出てきます。認知がゆがんできます。そのあたりに落ちているスリッパが、黒ネコの死体に見えたりするんですよ。でも本人にはそれが事実なんです。

そんなことを家族に「あそこに黒ネコの死体が」なんて言うと、怒られるんです。家族って怒るのですよ、訳の分からないことを言うと。「なに言っているの、そんな訳がないでしょう」と怒るのですよ。そうすると見えなくなってしまうの。そういうところに第三者の私が行くので、「聞いて、あそこにいるのだけど、誰も信じてくれない」と言うのです。

でも意味があるのです。妄想って意味があるのですよ。あなたにとって黒いネコってどんなイメージなの？ と私は聞きます。そうすると「やっぱり死ぬってことかしらね」と言うのです。これが認知症のなりかけの状態です。

そうか、最近死ぬことを感じているのね？ これが応じるということですよ。応えるというのはこういうことです。あれは黒ネコじゃなくてスリッパですよ、って言うのがさっきでいう「答え」になってしまうのね。だけど「応える」というのは、今の私のような応答なのですよ。

そうすると、その人が抱えている本当の根っこにある問題を教えてもらうことができるのです。そうか、最近死ぬということを時々感じているのだと。それからはその人と死ぬ話ができるのです。死ぬ話を怖がる必要はないですよ。「めでたく候う」なのですから。

(9) 分別を超えて

終わりがあるということは、ある意味救いだと思います。壊れてまで生きていくのは本当に苦しいと思います。「私は壊れていないですか」とよく聞かれます。大丈夫よ、あなたは

あなた以外の誰でもないよ、大丈夫と応えます。家族は応えてくれないの。否定してしまうの。もし今後そのような機会があったら、こちらの応答の方をこころ掛けてみてください。そうすると救われていくんですよ。壊れていたっていいと思えるのです。

少なくとも、一人でも分かってくれる人がいたら、人って救われていくのです。仏教で言ったら、阿弥陀さんはあなたが壊れているなんて全然思っていないと思うよ。どんなあなたであってもいいのよって言ってあげられる。おむつを当てているあなたも生きていてオーケー。何もできないあなたでも生きていてオーケーなのです。

ところが、皆さん自分は迷惑な存在になってまで生きたくないと言うわけです。ぽっくり死にたいとかね。誰の迷惑にもならず死んでいきたいと。とんでもないことです。では今まであなたは人に迷惑を掛けていませんか？

「惑」、迷い惑う。今までそうでしょう。生まれてからこのかた、ずっと迷い惑う生き方をしていたのですよ。そういう存在。年を取って何かができなくなって、突然迷惑を掛けたのではない。ずっと迷惑を掛けていた。だからもう、今から気にすることはいいですよ。もうやっちゃまっているの、すでに。だから大丈夫。

こういう在り方が私なのですよということを知っておきなさいということです。この在り方をしているのが自分だということを知らない人が凡夫なのです。他者の凡夫性は見えますが、自分の凡夫性は見えない。人の迷惑は分かるけど、自分がどれだけ迷ってきたか惑ってきたか、世間の価値観に揺さぶられて生きてきたかを忘れていただけです。年を取っても同じ生き方です。それは、変わらない。だから堂々とそのときどきの自分を生きて行けばいいのだと私は思っています。

今後、大事な人が自殺をされたり、あるいは大事なお孫さん、ひ孫さんが年齢問わずで亡くなるようなことがあったり、いろんなことがまだまだ起こると思います。不条理がね。そのときに、そもそも何も選べていないのだということ思い出していただきたいのです。

人の「死」に、いいとか悪いとかはありません。それを判断、分別するのは世間の価値観です。そういう価値観を厭う、嫌う、世間の価値観だけではない生き方をしてほしいというのが、親鸞聖人の思いなのです。

これが親鸞聖人からのメッセージです。くれぐれも世間の価値観だけで分別することをやめてくださいね。

世間では分別はとていいことですよね。私も古いタイプの教育をする学校で育ちましたので、「分別のある人間になりなさい」とずっと言われてきました。世間ではそうです。仏教では無分別が最高の境地なのです。世間の分別なんてなくしなさいと言っているのです。

こういう死に方はよくないとか、親より子が先に行くのはよくないとか、いっぱい分別しています。ではその分別をしている人とはどんな人ですかといえば、「煩惱でできている私」が分別しているだけなのです。そんな分別は超えなさいということです。生き方の中に少し、浄土の教えを含めた生き方をしてみてもどうでしょうかということです。

何でもありの意味が違うのですよ。何をしてもいいのではないのです。世を厭うしるしが出てくるのが浄土の教えなのです。それは世間の努力とは違う。賢善精進ということとは違うのです。何かがふっと変わっていくのです。このことを自分に確かめたり再確認したり、

思い出するための道場です。そのための阿弥陀仏です。そのためのお寺です。

私も、皆さんとまったく一緒ですし、基本はみんな一緒です。よく忘れますので、時々こうやってお話しさせていただくことで、自分の再確認をしているということです。お互いにこれからいろいろなことが起こると思いますけれども、同じお浄土に行きますから。同じところでまたお会いしましょう。

そのとき、どんな身になっているか分からない。悲惨な身になっているかも分からないけれども、どれも一緒です。いいか悪いか関係ない。いいか悪いか関係ないとは同朋です。みんな仲間、みんな同じ、絶対の平等なのです。歩けなくなろうが、おむつを当てられようが関係ないということです。

それが死ねない時代を生きている私たちに必要な教えなのです。もう世間の教えでは間に合いません。死なせてくれません、というお話です。

お時間になりましたので、今日はこれでお話を終了したいと思います。本当に長いお時間、ありがとうございました。